

## 「この蟹や」の歌と物部氏

ミシマにトキ

『古事記』の応神天皇の条に「この蟹やいつくの蟹」で始まる歌があり、蟹が進んでいくというユニークさでよく知られた歌となっている。ただ、この歌は宴席でカニ料理が出た、それでカニの題材の歌を作ったという程度にしかこれまで理解されてこなかったのではないかと思う。じつはこの歌は、地名詠み込み歌である。そして、どうやら詠み込まれているその地名は渡来系の人の土地らしいのだ。

まず、この歌のはじめの方に、「伊知遅島・美島」という地名が出てくる。この伊知遅島・美島はどこなのだろうか。一般に次のように解されている。

島はどこなのだらうか。一般に次のように解されている。  
角鹿から木幡に至る地名とみられるが、今どの島にあたるかは未詳。琵琶湖の島々。

(小学館 新編日本古典文学全集『古事記』)

いずれも所在不明。西湖岸の和迺付近とする説がある。

(角川『新訂古事記』武田祐吉訳注)

本居宣長は『古事記伝』の中で、契沖の越前の島とする説を批判し、琵琶湖の島々と解している。この宣長説が今に受け継がれているのである。

琵琶湖の島だというのは、その後にはさなみ道(大津辺り)や木幡の地名が出てくるので、その手前の地であって、島だから琵琶湖あたりだろうという推論らしい。だが、それはこの歌を根本的に読み誤っている。伊知遅島・美島は、道程の途中の地名ではなく実には到着地なのである。この歌は、次のように解すべきである。

【問】	この蟹や	何処の蟹	コノカニヤ	イツクノカニ
【答】	百伝ふ	角鹿の蟹	モモツタフ	ツヌガノカニ
【問】	横さらふ	何処に至る	ヨコサラフ	イツクニイタル
【答】	伊知遅島	美島にとき	イチヂシマ	ミシマニトキ

この冒頭の部分は、音韻的にも意味的にも対句になっている。

「どこの蟹か」と訊ねて「角鹿の蟹だ」と答える

「どこに行くのか」と訊ねて「イチヂシマ美島に行く」と答える

このように、旅の始点―終点を示された後に、具体的にその行程での描写に入るという構成になっ

ているのである。もしこのように解さないと、何処に行くのか（ヨコサラフ イツクニイタル）と問うたままその答えが、この歌の中にないということになってしまう。そんな小学生の作文のような歌ではないのである。

では、なぜこの歌が従来正しく解されてこなかったのかというと、「伊知遅島 美島にとき」の「トキ」の理解を間違ったのである。この「トク」は、用例の乏しい語なのだが、これまで「ツク（着く）」が母音交代した語であって、「着く」と同じ意味の語と解されてきた。

しかしそうではない。この語は、

ト（処）ク（動詞語尾） 〓 そこを処とする

という語なのである。「時」は「トク」の名詞形だが、夕暮れトキ（時）とは、時間の流れの中で「夕暮れの処」であり、昼飯ドキは、「昼飯の（時間的な）処」である。

また『古事記』で猿田彦が阿耶訶にいて漁をした時におぼれた話で、

底に沈み居る時の名は、底どく御魂と言ふ …

この「底どく御魂」は、沈んで行き「底に着く」ではない。「底に居る御魂」である。

また、『古事記』の歌謡で、

沖つ鳥 鴨著く島に 我が率寝し 妹は忘れじ 世のことごとくに

「鴨どく島」というのは、鴨が着く島ではなくて「鴨が住処としている」島である。じつは、『書紀』では同じ歌謡を「鴨着く島」と書いており、そのために「トク＝ツク」という理解が生まれ

たのだと思うが、それは『書紀』の頃には「とく」の意味がすでにとれなくなっており、書紀の編者がトクをツクと改変したと考えられるのである。

「トク」は「着く」とは本来違う語である。「処」である。だから、「伊知遅島・美島にトキ」は、「伊知遅島・美島をその処とする。そこを処として進む」と解さなければならない。そこが目的地だということである。

#### イチチシマ・ミシマ

では、伊知遅島・美島とはどこであろうか。ミシマというと撰津三島が知られているが、イチチシマというような名前は聞いたことがない。私はこのイチチ島というのは実際の地名ではなくて、ミシマに対する修飾語と考える。「イチチ島ミシマ」という語句は「百伝ふ角鹿」と対応する位置にあり、「百伝ふ」が角鹿に対する修飾語であるから、同じ位置にあるイチチ島もミシマに対する修飾語でなくてはバランスがとれない。

イチはイツなどと同じく古代語では、「イチ速く」「イチシロシ（著しい）」のように「威力が強い」という意味で使われた。だから「イチチ島ミシマ」は「尊厳ある三島」と解される。

じつはこの歌を初めて見た時、「イチ（一）」と三島の「三」を掛けているのかなとちょっと思ったが、イチ、ニ、サンというような数え方は比較的新しいように思われ、それはあるまいと思いつ直したことがある。ところが、改めて『時代別国語大辞典―上代編』でイチにあたってみると、

蓐を「一比古」、櫟を「二比乃木」といった記載があり、既に上代に「一」があつたようだ。だとすると「一」と「三」を掛けているということもあるかもしれない。

地名詠み込み歌

さて、このようにミシマを指して進むわけだが、木幡でヲトメに出会う。その部分についても解明されなければならない問題が残されている。

後姿は小楯ろかも 歯並は椎菱なす

後姿は「小楯」のようだという比喩だが、この比喩は普通ではない。縄文の土偶にあるように古代には太つたずん胴が好まれたということはあつたかも知れないが、女性に対しては「菱え草の」といった形容の方が普通であつて、楯という長方形で固いものを持ち出すのは、比喩としてそぐわない。この点、新編大系『古事記』も「後姿のすらりとしたところをそれにたとえたといわれるが、女性の美の形容として一般的とはいえない」と注している。

次の「歯並みは椎菱なす」の部分だが、この部分もすんなりとは読めず、昔から、契沖「椎しなす」、宣長「歯並はし菱なす」など読み方に苦労してきた。結局、「志比比斯那須||椎菱なす」と読み「椎や菱のように形がよい」（新編大系『古事記』）とされている。だが、読み方はこれでよいが解釈はちよつと違う。

まず「菱なす」を説明する。今、正方形の枠を作り上辺を無理に押すと、潰れて形が平行四辺

この蟹や 何処の蟹  
 百伝ふ 角鹿の蟹  
 横去らふ 何処に至る  
 伊知遅島 美島に著き  
 鳩鳥の 潜き息つき  
 しなだゆふ ささなみ道を  
 すくすくと我がいませばや  
 木幡の道に 遇はしし嬢子  
 後姿は 小楯ろかも  
 歯並みは 椎菱なす  
 櫟井の 丸邇坂の土を  
 端つ土は 肌赤らけみ  
 下土は 丹黒き故  
 三つ栗の その中つ土を  
 かぶつく 真火には当てず  
 眉画き 此に画き垂れ  
 遇はしし女 斯くもがと  
 我が見し子ら 斯くもがと  
 我が見し子に 転た蓋に  
 向ひ居るかも い添ひ居るかも

【訳】

この蟹はどここの蟹だ。  
 これは多くの土地を伝い来た角鹿の蟹だ。  
 横這いをしていったいどこへ行くのだ。  
 伊知遅島・美島に着いて、  
 カイツブリみたいに海に潜る海人が深く大きく息を  
 つくように息をつきながら、へしなだゆふささなみ路を  
 ずんずん私が歩いていくと、  
 木幡の道で偶然出会った乙女。  
 後姿は 小楯のようで、  
 歯並らびは椎や菱のように形がよい。  
 櫟井の丸邇坂の土を、  
 上の土は赤いから  
 下の方は赤黒いから、  
 三つ栗のその真ん中の土を取って、  
 へかぶつく強い火には当てずに作つた眉墨で  
 眉を引き、こんなふう引き垂らし、  
 偶然出会った娘。こうならばよいなど  
 私が思つた子。こうならばよいなど  
 私が思つた子に、いよいよまさしく  
 向かいあつて居ることだ。寄り添つて居ることだ。

新編日本古典文学全集『古事記』（小学館）p.262-263

【図表 7】 この蟹や何処の蟹



〔図表 8〕 石上三島

形になる。これが菱形であって「押されてひしゃげた形」である。「菱なす」というのはこのように「押し合っている。犇めいている」ということ。したがって、「齒並は椎菱なす」は、「齒並は椎の実が隙間なくならんでいる如くである」という意味である。しかし、齒並みをどんぐりに例えるというのはあまりない譬えである。

後姿を楯に例えたり、齒並みを椎のごとくだと言ったり、この歌はやや特異である。描写に不自然なところがある。どうしてこういうことになったのか。これはじつは、歌の御題として「地名」があつて、その地名を詠み込んで作った歌だからである。

まず、小楯が地名である。『紀』に出てくる山部連小楯は、この地名を名にしたものだろう。次の「椎菱なす」は、櫛井の「櫛」を導くための言葉である。櫛は「いちい櫛」もしくは「くぬぎ」とされるが、齒の譬えとしてどんぐりを出すことで「椎↓櫛」で地名の櫛井につなげているのである。

### 三島

この歌では角鹿を出てさきなみ路を抜け、木幡↓小楯↓櫛井とくる。では、目的地の美島はどこだろうか。摂津三嶋はこの行程からすると逆方向である。

じつは、石上神宮の門前に布留町とともに三島町がある。今は天理教の敷地になっているところに、鏡が池という大きな宮池を持つ三島神社があつた（現在、池は埋め立てられ、神社の場所

も移転している)。ここは古く三島村であり、また三島氏は石上神宮の社家を勤める氏族である。この石上の三島を到着地とするのが適当である。

ミシマのミは、御堂、御門などの接頭語、シマは囲った場所を表す。だから、ミシマは、その地名からみて、石上⇨物部氏の中核的な氏族が住まいした地であろう。撰津三島との繋がりはどうだろうか。三島から石上に移住があったのではないかと思う人もいるかもしれないが逆である。

三島神社というと、撰津の三島鴨神社、静岡の三嶋大社が知られているが、どちらも事代主神、大山祇神の二神を祭神とし共通している。静岡の三嶋大社の社家は矢田部氏であるが、矢田部氏は物部氏の一族である。『書紀』では矢田皇女は和弭氏の女宮主宅媛の子で仁徳妃となった皇女であり、矢田部は彼女のために設けられた御名代であるが、その矢田部氏は、後には物部氏に包含されている。

撰津の三島鴨神社は、三島江の東の淀川沿いにいた物部の韓国連が祭祀に係わったという社伝をもっている。さらに瀬戸内海、伊予の大三島の大山祇神社だが、この伊予は物部氏の小市國造、風速國造の支配する地であった。

このように見ると、各地の三島という地名は物部氏と係わりのある土地だということがわかる。物部氏に石上三島を本拠とする一族があつて、その一族が進出したところに自己の本拠の名を冠して三島神社を建立したものであろう。

岸俊男氏の指摘のように、ワニ氏は近江から山背の愛宕・宇治、奈良盆地北部に分布するが、盆地内では、和爾坂や和爾下神社のある櫛井あたりまでがワニ氏の領域と考えられてきたのではないだろうか。しかし、この歌では、近江のささなみ道をぬけ、木幡、櫛井というワニ氏の居住地を連ねた後、その到着地を石上の三島としている。これは物部氏もまたワニ氏すなわち渡来人であり、日本海のツヌガから上陸した氏族だということを示すものと考えられる。

#### 千葉の葛野

「この蟹や」の歌は、『古事記』で応神と宮主矢河枝比売の婚姻譚に出てくる歌である。天皇が近江に行幸した時に、木幡村で麗しい乙女に出会った。それがワニ氏の矢河枝比売(『紀』の宅姫)であつて、彼女は宇遲能和紀郎子、八田若郎女(矢田皇女)の母である。

物語の前段、近江に向かう途中、宇遲野から葛野をのぞんだ歌として次の歌が記される。

千葉の 葛野を見れば 百千足る 家庭も見ゆ 国の秀も見ゆ

この葛野が、渡来系氏族秦氏の本拠の地であることはいうまでもない。その地を「国の秀⇨国の特にすばらしい処」だと歌っているのである。秦氏は、葛野大堰のような土木工事を行って京都盆地をひらき、農耕や養蚕を行い、雄略紀には、庸・調の絹織物をうずたかく積んだという伝承を持つ。そういうところから、葛野を「国の秀」と歌い上げるのはうなずける。

これらの歌が応仁に妃を入れた時の歌だというのは事実ではあるまい。ワニ氏において伝承さ

れてきた歌があり、その歌を応仁に妃を入れたという伝承と合わせ一連の物語に仕立てたのであろう。

「千葉の葛野」の歌はハタ氏の土地を誉めた歌だが、ワニ氏の女の婚姻譚の中で語られるということは、ワニ氏が伝承してきた歌であり、ワニ氏が作った歌とみてよい。ワニ氏と秦氏の親密な関係を覗うことができる。

また物語が「天皇、近淡海国に越えいでましし時に」ではじまりことも、ワニが近江と密接な関係を持つ氏族であることを物語っている。

「この蟹や」の歌は次のように終わっている。

かくもがと 我が見し子ら かくもがと 我が見し子に 転<sup>え</sup>ただけだに 向ひ居るかも

この詩句は、この歌で歌われた地の人々が一堂に会し「向かい会っている」ことのように思われる。以降の章で明らかにするように、彼らは淀川水系で繋がる一続きの氏族として、連携しつつ政治を動かしていくことになる。